

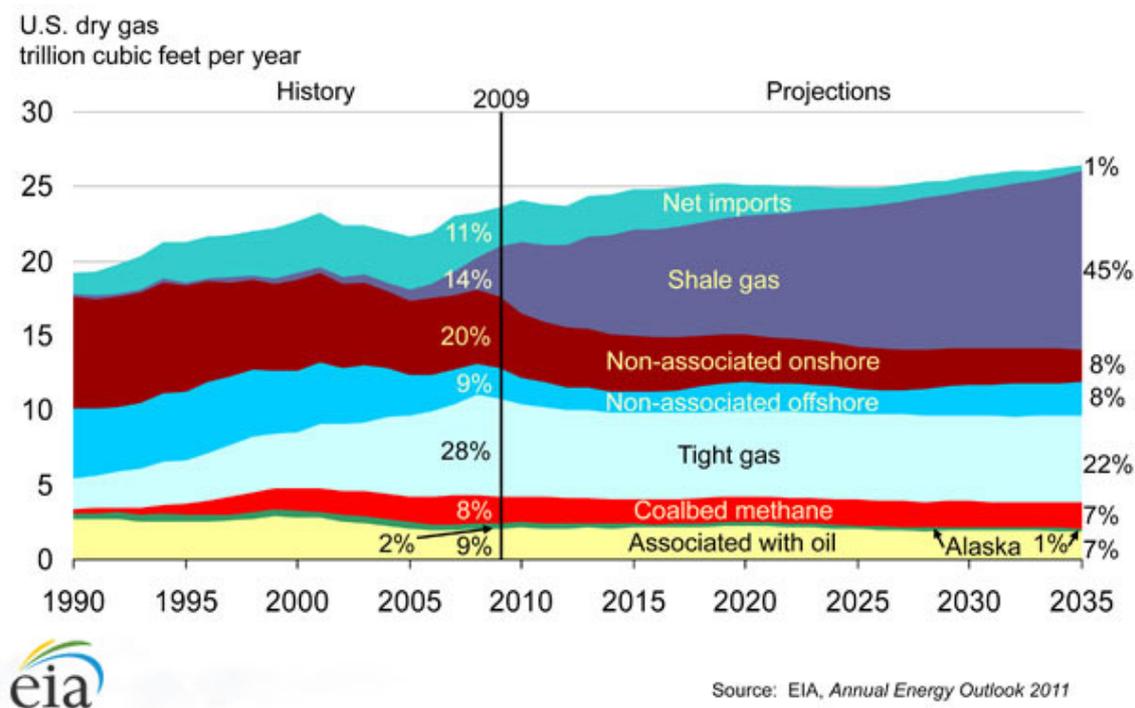
## 米国と CBM (炭層メタン)

電力・石炭ユニット担任  
理事 森田 浩仁

前回の本稿で、2014 年には豪州から CBM (石炭層メタン) を原料とする LNG の我が国向け出荷が始まることを紹介した。豪州の一部地域において石炭は、環境面での劣位を払拭し、クリーンなエネルギーとして生まれ変わりつつある。幾年か後には、石炭のメリットはそのクリーンさにある、ということになるかもしれない。

CBM は、豪州のみならず、世界最大級の天然ガス生産・消費国である米国で商業生産に供せられて 20 年以上の歴史を有する。

米国では、ここ数年の間に確認埋蔵量、生産量とも飛躍的な拡大を遂げたシェールガスばかりが目立っている。しかし、2009 年における CBM 生産量は下図に見るとおり、シェールガスの 14%には及ばないものの、総天然ガス供給量約 24 兆立方フィート (約 6700 億 m<sup>3</sup>) の 8%にも相当する 2 兆立方フィート (約 560 億 m<sup>3</sup>) であった。同年の我が国の消費量は 874 億 m<sup>3</sup> であったので、米国の CBM だけで 64%を賅うことができるという計算になる。



CBM の確認埋蔵量をみてみると、米国の天然ガスの確認埋蔵量が 284 兆立方フィートで

あるのに対してシェールガス 61 兆立方フィート、そして CBM は 19 兆立方フィートが確認されている。CBM については、RP レシオは 10 年以下であることは気になるが、シェールガス埋蔵量が大量に確認される以前の米国の RP レシオはこの水準であったことからすると、問題視するレベルではないのかもしれない。

米エネルギー省のエネルギー情報局 (EIA) が毎年発表する Annual Energy Outlook では、LNG 輸入の予測値を年々減少させている。2007 年版では 2030 年の輸入量を 1280 億 m<sup>3</sup> 程度と見込んでいたが、2011 年版では 400 億 m<sup>3</sup> 以下にまで下方修正した。上図にみるとおり、シェールガスの躍進著しいであろうことを見込んでのことである。つまり米国において輸入 LNG の必要性は急速に薄れつつある。

EIA が毎月発表する短期エネルギー需給見通し (Short-Term Energy Outlook ) でも 2011 年及び 2012 年の LNG 輸入見通しの下方修正が続いている。

逆に、Short-Term Energy Outlook は、米国からの天然ガス輸出見通しをここ数ヶ月連続して上方修正させており、2011 年の天然ガス輸出量は前年を 30% も上回る見通しであることを発表している。

米エネルギー省 (DOE) が、シェニエールエナジー・パートナーズ社 (Cheniere Energy Partners) が計画するサビーンプラス LNG 基地からの LNG 輸出計画 (自由貿易協定 (FTA ) 締結国以外への輸出を含め) を承認したのは今年の 5 月後半のことであった。

シェニエール EP 社は、同社が所有するサビーンプラス LNG 受入基地 (ルイジアナ州) に年産 350 万ト (公称能力は年産 400 万ト) の LNG トレインを 4 台設置し、豊富な国産ガスを原料に最大 1600 万ト/年 (803Bcf/年) の LNG 輸出を 2015 年にも開始する計画である。

サビーンプラス LNG 基地のあるルイジアナ州は CBM 堆積盆を有し、また全米三大 CBM 堆積盆のひとつ Black Warrior Basin のあるアラバマ州にも近接する。米国からも CBM を原料とする LNG が我が国向け輸出される日は近いかもしれない。

お問合せ : [report@tky.ieej.or.jp](mailto:report@tky.ieej.or.jp)